大型クラゲ来襲

日本海側では、このところ毎年のように秋になると大型クラゲの被害の話題を耳にします。大型クラゲはほとんどがエチゼンクラゲのようで、伊豆沿岸ではこれまで数個程度の入網例しかなく、東シナ海で発生したクラゲが日本海から津軽海峡を通って伊豆まで到達することなど、思いもよりませんでした。

平成21年10月15日に富戸網にエチゼンクラゲが４個入網したという報告があり、また、他地区の漁模様が気になり千葉県の鴨川漁協の定置部に電話してみたところ、エチゼンクラゲが船３隻分も入網し、漁にならないとのことでした。鴨川まで来ているなら伊豆にも来るのではとの懸念が強まり、情報収集を強化することにしました。その後も少ないながら入網が続き、21日には20～30個に増えたため、取締船「あまぎ」に乗船させてもらい、伊豆東岸の来遊状況を海上から観察しました。船上から観察できるのは水面下２～３m程度までですが、伊東市の手石島周辺から川奈沖にかけて20個体が観察され、東伊豆町の北川沖まで見られ合計25個体が確認されました。見られる範囲ではこの程度ですが、エチゼンクラゲの主な分布水深は20～30mのようで、網代漁業の泉澤氏によれば被害の大きい三陸沿岸でも目視できるのはこの程度の数だとのことで、かなりの数が来遊している可能性があると考えられました。

それでも北から来る流れはそれほど強くないので、一過性のものだろうと考えていたのですが、伊豆東岸定置網に入網した大型クラゲの合計個体数は図１に示したとおり増え続け、10月28日には網代古網と北川網で約1,000個体、川奈で約500個体が入網し、合計2800個体が入網する非常事態となりました。これだけの入網数ですから、個体数の正確なカウントなどできるものではなく、実際にはこれ以上の数が入網していたと考えられます。その後も大量入網が続き、一時網を上げざるをえなくなった漁場もあり、漁獲物がクラゲの触手で傷んだり、選別が困難になり、魚価も大きなダメージを受けました。

大量入網のピークは11月上旬まで続き、その後も12月上旬までまとまった入網がみられ、12月中旬でようやく入網の報告がなくなりました。この間に垣網が破損した漁場もあり、今回の大型クラゲの来遊は伊豆東岸の定置漁場に大きな被害をもたらしました。隣接する神奈川県でもかなりのダメージがあったようで、三重県の定置漁場でも入網がみられました。

これまで、伊豆半島周辺は北上して流れる黒潮の影響が強いと考えられており、黒潮と反対に流れる寒流の影響がこれほどあるとは考え及びませんでした。房総半島に接岸していた黒潮が離岸した際に大型クラゲが来遊したので、同様な海況の時にブリが北から来るという説を肯定しているかもしれません。また、エチゼンクラゲは 15℃以下になると死ぬと言われていましたが、北海道から

5℃以下でも元気に泳いでいたという報告もあります。これまで東シナ海でしか再生産しないと言われていましたが、伊豆沿岸で傘の直径 30 ㎝程度の小型個体が入網していたことから、国内で再生産が行われないか懸念されます。いずれにしろ、今回はこれまでの知見をはるかに超える事態が起きたと言えそうです。

今のところ決定的な打開策がなく、漁具改良や駆除作業などで対応するしかありません。このような状況が続くと定置網経営は非常に圧迫されますし、平成 22 年はどうなるかも含め、今後の動向に注意していきたいと思います。

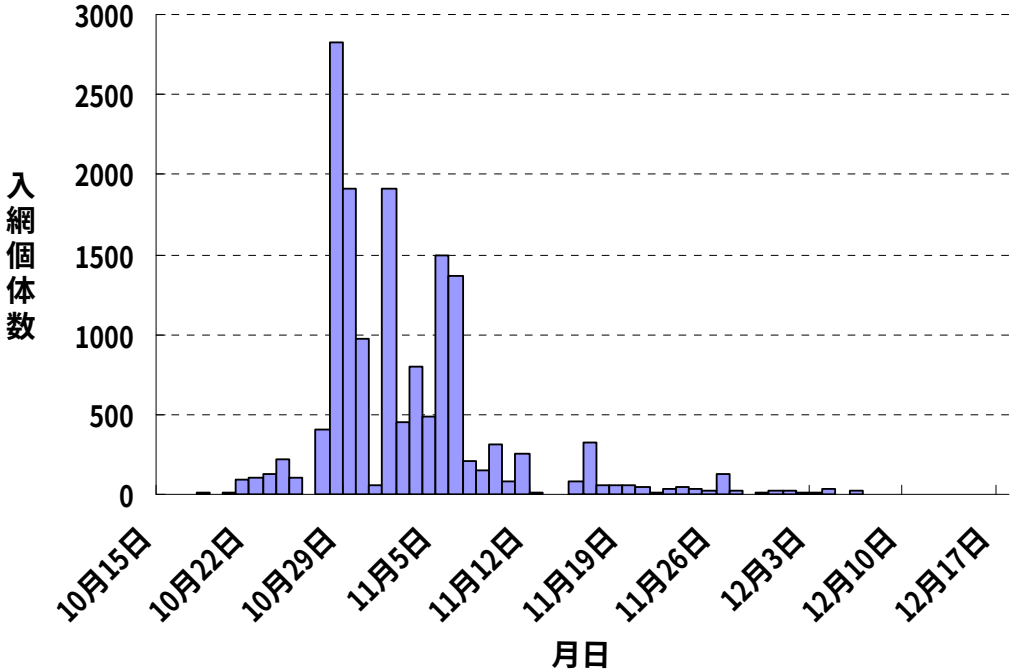

図1　伊豆東岸定置網における大型クラゲ入網個体数

写真１　漁獲物の大半を占めるエチゼンクラゲ

（御宿昭彦）